引札の世界

■引札のはじまり

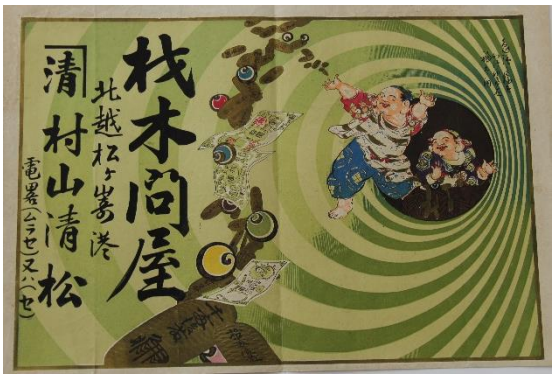
引札とは、商店が開店や商品売出しを宣伝するために配られたふだで、現在のチラシ広告にあたるものです。引札という言葉は江戸時代中期頃に生まれ、その語源は「お客を引く」、「引き付ける」、「配る（引く）」など諸説あり、江戸では「引札」、京坂では「ちらし」と呼んだとされています。

引札は商業活動が活発化した 18 世紀末から 19 世紀初めにかけて盛んにつくられるようになりました。また、平賀源内や山東京伝などの文人がその名声と文章力を買われて広告文を作成することもありました。明治初期頃までは、薬や化粧品、呉服関係の引札が目立ち、どちらかというと効能や宣伝文句などの文字を主体としたものが多かったようです。

明治 10 年代の太田胃散の引札（当館所蔵）
薬の効能、用法や値段などが記されている

■近代以降の引札

明治期から大正期にかけて、錦絵の技法を取り入れた正月用の引札が流行し、各商店が正月の挨拶とともに得意先へ配るようになりました。図柄も様々なものが登場し、客の関心を引きつけるための華やかな色彩と大胆な構図、巧みな宣伝文句などは、今もなお見る者を魅了します。このように鮮明で華麗な引札が盛んにつくられるようになった背景には、木版印刷から、銅板印刷や石版印刷へと、印刷技術の進歩がありました。しかし、新聞が各地で発刊されるようになり、折り込み広告や掲載広告が一般的になるにつれて、引札はだんだんと姿を消していきました。



大正期の材木問屋の引札（当館所蔵）